

10. 福井城跡 (山里口御門地点)

所在地：福井市大手3丁目

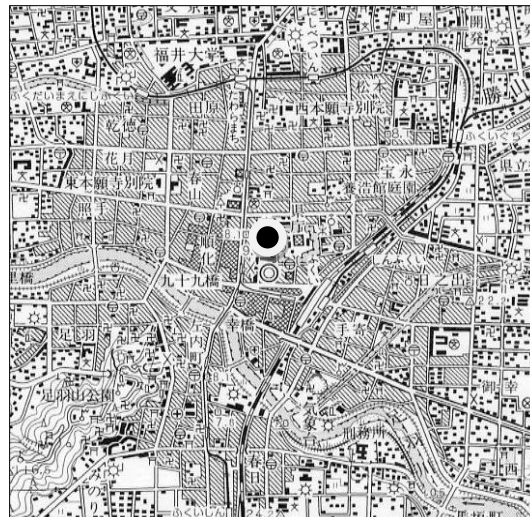
調査原因：山里口御門復元整備事業

調査期間：平成27年3月23日～3月31日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：160 m²

時代：近世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 調査区は、現在、福井県庁が立地する福井城本丸跡の西北部に位置します。ここには、「山里」曲輪への出口となる枡形門があり、「埋御門」「天守台下門」などとも呼ばれてきました。

今回、この門の復元整備にあたり、隣接する南北の石垣の解体・修復を行うこととなり、石垣の現状を記録保存するとともに、その築造過程の解明を目的に発掘調査に着手しました。

遺構 26年度末まで発掘調査は1週間程しか行っていないため、ここでの発表内容については、南地区の最上層の遺構の説明にとどめます(第1図)。

F・G面石垣最上部の天端石には、1.5m(五尺)間隔で方形のくぼみ(ホゾ穴)があり、石垣上に建っていた土塀の主柱のホゾ穴と考えています。石垣の内側に沿って散乱している石材は、裏込石の最上部か、土塀の基礎に使われていたものと考えています。こぶし大の笏谷石の割石のほか、笏谷石製の石瓦の破片を多く含んでいました。

南地区の南縁部では、石材を円形に並べた遺構(石囲1)と一列に並べた遺構(石列1)が見つかりました。石囲1は、土塀が倒れないように支えていた控柱を据えた痕跡と考えています。

遺物 遺物のほとんどは瓦で、石製と陶製のものがあります。石瓦はすべて破片で、裏込に使われていました。陶製の瓦には、素焼きのいぶし瓦と釉薬を掛けた越前赤瓦があります。最上年では、17世紀の瓦が多いですが、19世紀のものも含まれています。

まとめ この周辺の石垣は、慶長6年(1601)からの福井城築城開始にともなって築造され、寛文9年(1669)の寛文大火による山里口御門焼失によって傷んだため、修復がなされたことが福井藩の記録に残されています。

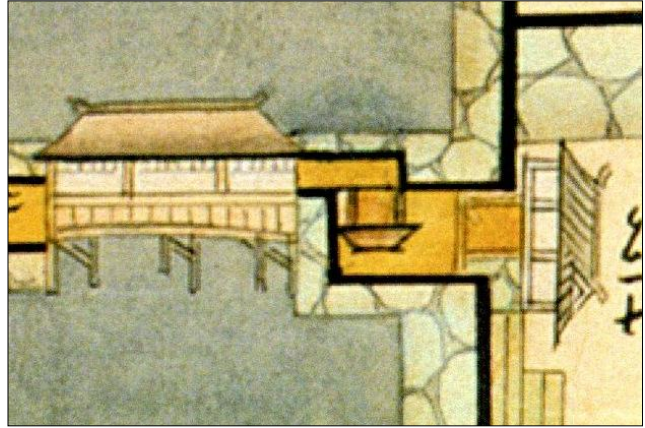
裏込に石瓦の破片が大量に使われていることから、少なくとも石垣の上部は大火後に積み直されたものと考えています。

発掘調査は継続して平成27年8月までの予定で行っており、今後の調査の中で、築造当初の石垣と修復された石垣の構築方法などの違いを明らかにしていきたいと考えています。

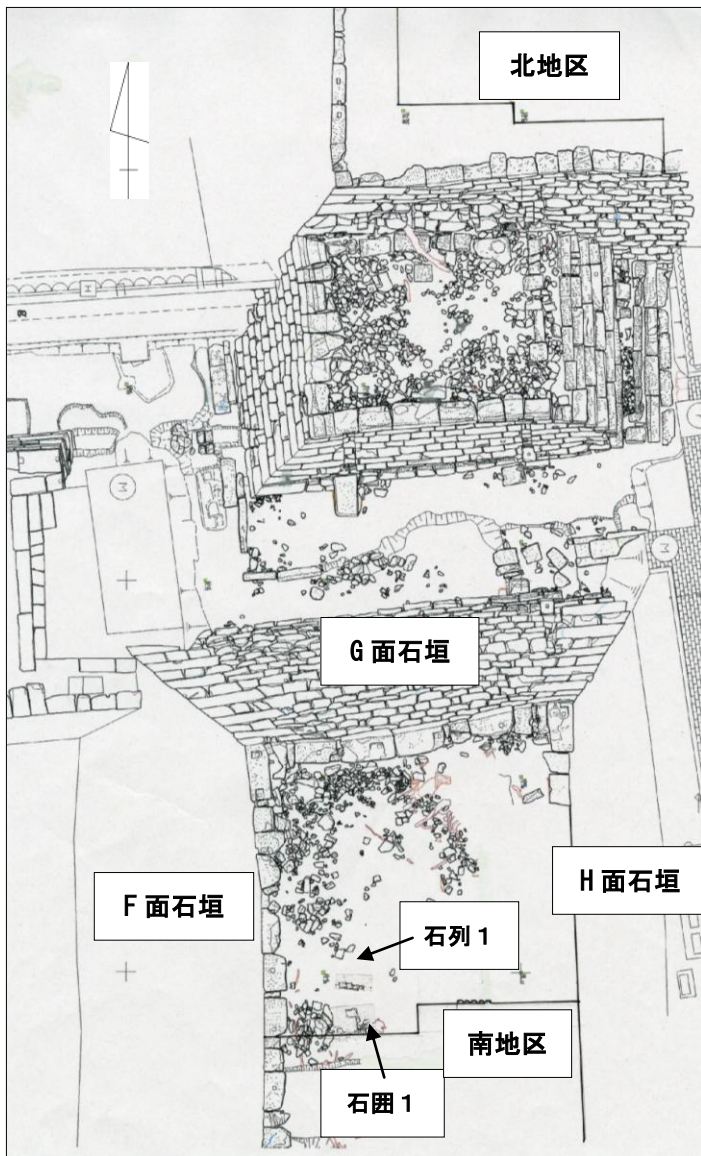
(中原義史)



調査区の位置



「御城下之図」正徳四年（1714）



調査区上面平面図（縮尺 1/200）



石囲1・石列1（南地区南縁部）



石垣天端石のほぞ穴（北地区）

第1図 調査区全体図